

21世紀に訴えかける激烈青春

わが青春つきるとも——伊藤千代子の生涯

石子
順

日本映画はこれまでこのような女性を描いただろうか。山本宣治の「武器なき^{たたか}闘い」(1960年、山本薩夫監督)がある。小林多喜二の「小林多喜二」(1974年、今井正監督)がある。プロレタリア文学の「蟹工船」(1953年、山村聰監督)、「太陽のない街」(1954年、山本薩夫監督)の映画化はあった。だが目覚めと抵抗と、たたかいぬいた乙女がいたことを本格的に描かれることはなかったのでは。その死から100年近くたって無名の人、伊藤千代子が映画によりみがえった。ポスターが強烈だ。ふり乱した黒髪は暴力への不服





製糸労働者を励ます千代子



未来へ向かってスクラムを組む千代子

従を示し、その眼光はたたかい抜く意志につらぬかれ、ひきしまった口は怒りの声をあげようとし、全体にかしいだ顔は倒されても立ちあがる不屈さを見せている。この画像が動いて訴え、走り、叫び、同志たちとともにたたかう伊藤千代子の映画となつて、見るものその一九二〇年代に参加させて、伊藤千代子を体験さ

せる。

伊藤千代子（井上百合子）の成長映画である。一九三五年、恩師土屋文明（金田明夫）が千代子の母校東京女子大学で万葉集特別講義の前に伊藤千代子のことを語りはじめる。

岩波家の養女となり、小学生の頃から読書家で、女

学校に入学し、卒業すると小学校代用教員をしながら東京の大学入学をめざす。

そのような少女時代の点描に、自力で進学をめざす意欲をとらえ、とくに英語教育習得には熱心になる向上心を見せる。

時代は一九二五年、政府が社会主義運動や共産主義運動を弾圧するために治安維持法を公布した。翌年、千代子は東京女子大学英语専攻部を受験し合格する。そうした学生生活のなか、社会科学研究会に入会。このころの女子大生活や世の中を知るためのマルクスの勉強会などが描かれる。千代子は東大新人会の浅野晃（窪塚俊介）と出会った。日本女子大学の

学生西村桜東洋（印南唯）などと反戦ビラを街頭に貼ったり危険な活動もする。千代子の視野が広がり、実践行動にも参加。長野の製糸工場の女工平川ふみ（塚瀬香名子）たちの生活改善、労働組合作りの支援行動もした。

千代子は社会変革をめざす浅野晃と結婚。1928年普通選挙で労働党候補者山本懸蔵の選挙資金に養父（津嘉山正種）が送ってくれた授業料を用立てた。卒業間近だったが千代子は退学になる。そうした状況描写が続き、1928年3月15日、水野の文書を持った千代子は特高に追われ街頭で逮捕された。

取調室で特高の山岸警部（石丸謙二郎）たちによる訊問と暴力的拷問と屈辱的な拷問。仲間の名前をいわず耐える千代子の抵抗力、精神力。未決で市ヶ谷刑務所独房7号室に収監されても千代子のたたかいは続く。



1928年3月15日朝、特高警察の追跡をかわす千代子

同志たちと壁を叩いたり、わずかな運動時間、庭に埋めた石の下にメモを書いたりして情報・連絡をとりあう巧みさ。ロシア革命記念日には、原（宜野座万鈴）塩沢（角田萌果）たちと連絡を密にして時間をきめ「赤旗の歌」を一斉蜂起するような勢いで合唱するシーンの痛快さ。女看守たちの中止命令の怒号を圧倒して刑務所内にひびく歌声。スローガンの叫び。

だが、こうしたなかで治安維持法を振りかざして、「我々は天皇陛下の警察官だ。おまえら国賊の一人や二人、殺したっていいんだぞ」と山岸警部が千代子に居丈高になって迫る。千代子は耐えぬいたが浅野はどうなったか。検事局に思想検査倉田に呼ばれた千代子は転向をすすめられた。拒否すると「転向すれば釈放する」といつつ「あなたの夫もいる」と浅野の変節を告げるあたり権力者の優越感。千代子のショック。



またいとこ役の平川ふみの相談にのる千代子

思想検事の陰険な策謀がうごめいていくなかで千代子が――。

1927年から1929年へ、日本を変革しようとした伊藤千代子。生きたいといいつづけた知性が暗黒世界に彗星のように輝く。千代子と喜怒哀楽ともにした青春女性群像がその志を継ぐようにして生きていく。

この映画は、侵略戦争が迫りつつあるなかで人間が無権利の時代に反戦と主権在民を主張し、民衆の幸せのために戦った若い女性と、それを支えつつ、未来を切り開こうとした人々を描いた理想に燃える映画である。

伊藤千代子の生涯を発掘し捉えつづけた藤田廣登さんの研究成果『時代の証言者 伊藤千代子』をもとに、桂壮三郎監督が、これまで盲点であった一九二〇年代の昭和の史実をとらえたりアリズム映画として完成した意味は大きい。

井上百合子が我がことのように演じて伊藤千代子は現代によみがえった。同志たちを演じる若い人たちの明るさと活気がいい。竹下景子の東京女子大学学長の「学生の思考能力を尊重する」というりんとした姿勢。金田明夫の教え子を思い、歌にその魂をうたいあげた土屋文明も忘れられない。

この映画は滅びた治安維持法という悪法を21世紀にあらためて告発した。治安維持法の犠牲者に何の謝罪、賠償もしない国に対してこれでもいいのかと問いつめている。じんとくる結末には現代に生きる人々に伊藤千代子がいたことを忘れるなど呼びかける。若い人たちにあなたたちと同じ年頃の犠牲者がどれだけ生きたかったかと訴える。

(いしこ じゅん・映画評論家)